

2023年度

専門学校北海道リハビリテーション大学

言語聴覚学科

授業科目 (科目ID)	言語発達障害V		担当教員 (実務経験)	永野勢津子 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内障害児施設にて言語聴覚士として30年以上勤務。		
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	脳性麻痺等の重度障害について理解する。コミュニケーションの取り方・支援方法について理解する。					
到達目標	(1)脳性麻痺、重度重複障害の基礎知識(概念、症状、分類)について理解する。(2)言語・コミュニケーション発達支援、(3)家族支援について学ぶ。(4)子どもの神経発達、脳画像の基礎知識を学ぶ。					
テキスト・ 参考図書等	(教) 子育てハンドブック～脳性まひ児とともに～ 発行所:市村出版					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	80%	定期試験80%、レポート20%			
	レポート	20%				
	小テスト	%				
	提出物	%				
	その他	%				
履修上の 留意事項	復習をしっかりとしてください。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1, 2	基礎知識	脳性麻痺とは、脳性麻痺の原因と発生率			
	3	発達障害	脳性麻痺の分類と症状、脳性麻痺の合併症			
	4	発達障害	言語・コミュニケーション障害を阻害する要因、(1)運動機能障害(2)知的障害、			
	5	発達障害	言語・コミュニケーション障害を阻害する要因、(3)聴覚障害(4)高次脳機能障害			
	6	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	姿勢運動障害へのアプローチ			
	7	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	言語・コミュニケーション発達障害(1)基本的な考え方			
	8, 9	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	(2)姿勢とオーラルコントロール、(3)前言語期の支援			
	10	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	(4)ことばの獲得期の支援			
	11	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	(5)拡大・代替コミュニケーションの獲得			
	12	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	(6)話し言葉の準備段階へのアプローチ			
	13	リハビリテーション、言語・コミュニケーション障害、話しことばの発達	(7)話し言葉の改善			
	14	AAC	拡大代替コミュニケーション			
	15	家族支援	家族支援			

2023年度

専門学校北海道リハビリテーション大学校

言語聴覚学科

授業科目 (科目ID)	言語発達障害VI		担当教員	箭本 尚子		
			(実務経験)	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内児童福祉施設にて言語聴覚士として17年勤務。		
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	それぞれの知能検査の目的を学び、検査方法を実践から学び、結果を解釈する。					
到達目標	① 検査方法を習得する。 ② 検査結果から課題を抽出し、支援方法について考えることができる。					
テキスト・ 参考図書等	(教)言語聴覚士のための臨床実習(小児編) 著者名:深浦順一 発行所:建帛社					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	80%	定期試験と小テストを合わせて評価する。			
	レポート	%				
	小テスト	20%				
	提出物	%				
	その他	%				
履修上の 留意事項	欠席せず、復習をすること。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題			履修内容	
	1	知能検査			評価の目的と方法	
	2	知能検査			WPPSI-III知能検査 演習・解釈	
	3	知能検査			WPPSI-III知能検査 演習・解釈	
	4	知能検査			WISC-IV知能検査 演習・解釈	
	5	知能検査			WISC-IV知能検査 演習・解釈	
	6	知能検査			WISC-IV知能検査 演習・解釈	
	7	知能検査			日本版K-ABC II 演習・解釈	
	8	知能検査			日本版K-ABC II 演習・解釈	
	9	知能検査			日本版K-ABC II 演習・解釈	
	10	知能検査			DN-CAS認知評価システム 演習・解釈	
	11	発達検査			新版K式発達検査2001 演習・解釈	
	12	発達検査			新版K式発達検査2002 演習・解釈	
	13	発達検査			新版K式発達検査2003 演習・解釈	
	14	事例			事例報告の仕方	
15	事例			事例報告の仕方		

授業科目 (科目ID)	構音障害Ⅱ		担当教員	佐々木 勇輝		
			(実務経験)	有 <input checked="" type="checkbox"/>	無 <input type="checkbox"/>	道内児童福祉施設にて言語聴覚士として6年間勤務
対象年次・学期	2年・通年		必修・選択区分	必修	単位数	2単位
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	20回	時間数	40時間
授業目的	機能性構音障害・器質性構音障害について理解する。					
到達目標	各構音障害の定義から基礎的知識、臨床への応用までを学ぶ。 構音障害の基礎や検査方法、実際の教材の研究や指導のカリキュラムの立て方などを学ぶ。					
テキスト・ 参考図書等	(教): 言語聴覚士のための臨床歯科医学 編:道健一 発行所:医歯薬出版 改訂機能性構音障害 編者:本間慎治 発行所:建帛社 (参):言語聴覚士テキスト 構音障害の臨床—基礎知識と実践マニュアル— 改訂第2版 著者名:阿部雅子 発行所:金原出版					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	80%	定期試験・小テストにより評価を行う。			
	レポート	%				
	小テスト	20%				
	提出物	%				
	その他	%				
履修上の 留意事項	欠席しないこと、復習すること。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	器質性構音障害について	発声発語器官の発生、器質性構音障害とは			
	2	器質性構音障害について	口唇口蓋裂、滲出性中耳炎			
	3	器質性構音障害について	口唇口蓋裂、滲出性中耳炎			
	4	器質性構音障害について	先天性鼻咽腔閉鎖不全症			
	5	器質性構音障害について	簡易検査・機器を用いた検査			
	6	器質性構音障害について	医学的アプローチ			
	7	器質性構音障害について	言語聴覚士による訓練			
	8	器質性構音障害について	口腔疾患による構音障害			
	9	器質性構音障害について	口腔疾患による構音障害			
	10	器質性構音障害について	チームアプローチについて			
	11	機能性構音障害について	発声・構音の仕組み			
	12	機能性構音障害について	構音の発達			
	13	機能性構音障害について	機能性構音障害について			
	14	機能性構音障害について	構音の誤りについて・異常構音について			
15	機能性構音障害について	構音の誤りについて・異常構音について				

履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容
	16	機能性構音障害について	新版構音検査の実施
	17	機能性構音障害について	新版構音検査の実施
	18	機能性構音障害について	構音訓練の適応について、方法について
	19	機能性構音障害について	構音訓練の適応について、方法について
	20	機能性構音障害について	構音訓練の実施

授業科目 (科目ID)	構音障害演習		担当教員 (実務経験)	阿部由美 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 言語聴覚士として市内病院にて14年、訪問看護ステーションにて4年勤務		
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	運動障害性構音障害の対象者に対して、基本的検査・評価技能を実技的に学ぶ。					
到達目標	運動障害性構音障害の対象者に対して、標準ディサースリア検査の評価手技を習得する。					
テキスト・ 参考図書等	適宜、資料を配布する。					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	90%	定期試験90%(筆記6割・実技4割)、小テスト10%により評価を行う。			
	レポート	%				
	小テスト	10%				
	提出物	%				
	その他	%				
履修上の 留意事項	忘れ物なく、欠席なく授業に臨むこと。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	運動障害性構音障害の評価	評価とは、検査される側になってみよう			
	2	検査	(スクリーニング含む検査)、SLTA-ST(1)			
	3	検査	SLTA-ST(1)			
	4	検査	AMSD			
	5	検査	AMSD			
	6	検査	AMSD			
	7	検査	AMSD			
	8	検査	AMSD			
	9	訓練、報告書	構音障害の訓練(様々な訓練)			
	10	訓練、報告書	構音障害の訓練(様々な訓練)			
	11	訓練、報告書	様々な訓練法の実際、報告書の書き方(問題点・目標の見つけ方)			
	12	訓練、報告書	様々な訓練法の実際、報告書の書き方(問題点・目標の見つけ方)			
	13	訓練、報告書	様々な訓練法の実際、報告書の書き方(問題点・目標の見つけ方)			
	14	ICFに基づいた評価結果の解釈	言語聴療法の進め方(様々な訓練法の実際)			
15	ICFに基づいた評価結果の解釈	言語聴療法の進め方(様々な訓練法の実際)				

授業科目 (科目ID)	非流暢性障害	担当教員 (実務経験)	小屋 雄二 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 発達支援センター及びことばの教室にて20年勤務。		
対象年次・学期	2年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義	授業回数(1回90分)	15回	時間数	30位間
授業目的	① 吃音の情報収集の仕方を理解する。② 吃音の中核症状と二次的の症状を理解する。③ 吃音の進展段階における特徴を理解する。 ④ 幼児期、学童期、成人期の吃音者の心理的状況を理解する。				
到達目標	吃音の症状や基本的事項を学習し、臨床の場で基本的な対応ができるための知識を習得する。吃音の症状や特徴、評価法、吃音の進展段階と幼児期から成人期までの各年代での指導・訓練の概要を学ぶ。				
テキスト・ 参考図書等	(教)エビデンスに基づいた吃音支援 著者名:菊池良和 発行所:学苑社 (参)言語聴覚士テキスト第3版 著者名:大森孝一、深浦順一編集 発行所:医歯薬出版 (参)「吃音のこと、わかってください」 著者名:北川敬一 発行所:岩崎書店				
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80%	定期試験・レポート・その他を合わせて評価を行う。		
	レポート	20%			
	小テスト	%			
	提出物	%			
	受講態度・出席状況	%			
履修上の 留意事項	他者を気にせず、質問を通してより授業が深化する方向で授業に臨むこと。				
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	吃音の基礎知識	吃音の基礎知識、ある女子学生の体験記		
	2	吃音の基礎知識	定義、発生率、吃音症状(中核症状、二次的の症状)、進展段階ごとの特徴		
	3	症状分析	「サンデー九」北海道言友会(DVD)		
	4	症状分析	吃音症状分析(1)		
	5	症状分析	吃音症状分析(2)		
	6	歴 史	原因論		
	7	評 価	吃音検査法演習(1)		
	8	評 価	吃音検査法演習(2)		
	9	保護者支援	吃音の理解と子どもへの対応		
	10	ライフサイクル上の吃音問題と支援	からかい・いじめの配慮		
	11	指導・訓練法(1)	環境調整法、リッカムプログラム		
	12	指導・訓練法(2)	リズム法、流暢性形成法 吃音緩和法 統合的アプローチ		
	13	指導・訓練法(3)	メンタルリハーサル法、認知行動療法		
	14	その他の非流暢性	獲得性吃音、クラッタリング		
15	自助グループ	言友会の活動 吃音者宣言			

授業科目 (科目ID)	摂食嚥下障害Ⅱ		担当教員 (実務経験)	松山 大輔 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内急性・回復期病院で言語聴覚士として5年間勤務		
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	10回	時間数	20時間
授業目的	摂食嚥下障害の評価、診断方法について学び、問題点の抽出、治療計画の立案に結び付ける。					
到達目標	・摂食嚥下障害に関する評価方法を理解する ・スクリーニングの種類と意義を理解し説明できる ・VF、VEの違いを理解する					
テキスト・ 参考図書等	(教)脳卒中の摂食嚥下障害 第3版 著者名:藤島一郎・谷口洋著 発行所:医歯薬出版 (教)嚥下障害ポケットマニュアル 第4版 著者名:聖隷嚥下チーム 発行所:医歯薬出版					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	100%	定期試験の結果から評価する			
	レポート	%				
	小テスト	%				
	提出物	%				
	その他	%				
履修上の 留意事項	映像や実際の手技を交えながら行います。復習をしっかりとすること。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	摂食嚥下の検査・診断	診察(問診、検査データの見方) 摂食場面の観察・評価			
	2	摂食嚥下の検査・診断	一般身体所見 脳神経所見			
	3	スクリーニング検査	スクリーニングの意義と種類			
	4	スクリーニング検査	スクリーニング検査 解釈と統合			
	5	嚥下造影検査	嚥下造影(VF) VFの目的 VFの実際			
	6	嚥下内視鏡検査	嚥下内視鏡検査(VE) VEの目的 VEの実際			
	7	その他の検査・評価	SSPT 嚥下圧測定検査 舌圧ほか			
	8	その他の検査・評価	MASA			
	9	栄養学的評価	栄養学的評価・フィジカルアセスメント			
	10	摂食嚥下障害の総合評価	総合評価(グレード評価・評価の解釈と問題点の抽出)			
	11					
	12					
	13					
	14					
15						

授業科目 (科目ID)	摂食嚥下障害Ⅲ		担当教員 (実務経験)	北風 祐子 道内病院で言語聴覚士として20年以上勤務し、養成校にて10年以上勤務 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/>		
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	基本的な訓練方法、訓練の実施、記録法、報告書作成を学び、リスク管理を念頭に置いた適切な活動ができる臨床能力を養う。					
到達目標	・疾患や障害の特徴や安全性を考慮し、適切な訓練・指導・支援を選択できる。・障害の全体像に基づき、訓練・指導・支援の優先順位を決定できる。・摂食・嚥下障害の検査、評価結果から、訓練プログラムを立案できるようになる。・嚥下調整食の適応、代替栄養法の適応が説明できるようになる。					
テキスト・参考図書等	(教)脳卒中の摂食嚥下障害 第3版 著者名:藤島一郎・谷口洋 著 発行所:医歯薬出版 (参)摂食嚥下ポケットマニュアル 著者名:藤島一郎(監) 発行所:医歯薬出版					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	100%	定期試験により評価を行う。			
	レポート	%				
	小テスト	%				
	提出物	%				
	その他	%				
履修上の留意事項	摂食嚥下障害Ⅰでの解剖や理論的背景を復習しておくこと。					
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	治療・訓練の適応	リハビリテーションアプローチについて			
	2	姿勢と摂食嚥下	摂食嚥下時の姿勢について			
	3	食品調整	嚥下調整食、とろみ剤、嗜好			
	4	具体的な訓練法	治療的アプローチ			
	5	具体的な訓練法	治療的アプローチ			
	6	具体的な訓練法	治療的アプローチ			
	7	具体的な訓練法	代償的アプローチ(代替栄養法)			
	8	具体的な訓練法	環境改善的アプローチ(姿勢と介助)			
	9	具体的な訓練法	頭頸部腫瘍に対するアプローチ			
	10	チームアプローチ	嚥下チーム・NST・呼吸ケアチーム・WOC			
	11	目標設定	予後因子、ゴールと訓練の説明、家族指導			
	12	内科的治療と外科的治療	薬物療法、機能改善術、誤嚥防止術			
	13	気管切開のある患者への対処	カニューレの種類と特徴			
	14	リスクマネジメントについて	窒息・誤嚥への対応			
15	摂食嚥下障害における倫理の問題	臨床倫理、経口摂取と肺炎の問題				

授業科目 (科目ID)	摂食嚥下障害演習 I		担当教員 (実務経験)	山下 奉位 道内病院にて18年、言語聴覚士として勤務		
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	摂食・嚥下に関する検査練習、結果解析を行う。検査結果と総合的な情報収集から、適切な目標設定、治療プログラムを立案する知識を身につける。					
到達目標	・スクリーニングテストの手順を理解し実施できる ・各種検査の意味を理解し解析、統合できる ・得た情報と検査結果を総合して嚥下の評価ができる。					
テキスト・ 参考図書等	(教)脳卒中の摂食嚥下障害 第3版 著者名:藤島一郎・谷口洋著 発行所:医歯薬出版 (教)嚥下障害ポケットマニュアル 第4版 著者名:聖隷嚥下チーム 発行所:医歯薬出版					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	80%	・定期試験80% ・小テスト20%			
	レポート	%				
	小テスト	20%				
	提出物	%				
その他	%					
履修上の 留意事項	実践的な授業です。臨床に生かせるように積極的に参加すること					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	嚥下評価の概要	嚥下評価の意義と目的			
	2	スクリーニングテスト	反復唾液飲みテスト(RSST)について・改定水飲み検査(MWST)について			
	3	スクリーニングテスト	RSST、MWSTの練習			
	4	食事姿勢の概念	姿勢評価・食事するための姿勢調整			
	5	スクリーニングテスト	フードテスト(FT)について			
	6	統合と解釈	フィジカルアセスメント			
	7	統合と解釈	栄養学的評価			
	8	統合と解釈	RSST、MWSTの意味すること			
	9	統合と解釈	RSSTとMWST、FTの関連			
	10	統合と解釈	VF,VEの見方(1)			
	11	統合と解釈	VF,VEの見方(2)			
	12	統合と解釈	症例で結果の解釈と問題点の抽出			
	13	治療プログラム	治療方法			
	14	口腔ケア	口腔ケアの意義・口腔評価			
15	介助者への指導	食事介助方法、適切な食形態、トロミ実習				

授業科目 (科目ID)	聴覚障害Ⅱ		担当教員 (実務経験)	岡崎 聡子 市内大学病院で13年、市内総合病院で8年言語聴覚士として勤務		
対象年次・学期	2年・通年		必修・選択区分	必修	単位数	2単位
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	20回	時間数	40時間
授業目的	こどもの発達と聴覚障害の関連性について理解する。 発達段階に応じた評価、ハビリテーションの基礎知識と技法、援助について学ぶ。					
到達目標	・聴覚の正常発達について理解する ・検査、訓練について小児特有の工夫について考える ・養育者へのかかわりについて学ぶ					
テキスト・参考図書等	標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版 医学書院					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	100%	・定期試験にて評価を行う。			
	レポート	%				
	小テスト	%				
	提出物	%				
	その他	%				
履修上の留意事項	授業内容に関する私語は歓迎。積極的に発言し、自分のものとして学び取ること。					
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	小児難聴のハビリテーションの概要①	難聴児のハビリテーションの目的と考え方			
	2	小児難聴のハビリテーションの概要②	養育者への指導			
	3	小児期の発達と難聴の影響	乳児期・幼児期・学童期			
	4	小児難聴の評価①	発達に応じた聴覚評価			
	5	小児難聴の評価②	関連情報の収集			
	6	小児難聴の評価③	コミュニケーション発達評価			
	7	小児難聴の評価④	言語評価			
	8	小児難聴の評価④	言語評価			
	9	小児難聴の指導・支援①	聴覚活用と聴覚学習			
	10	小児難聴の指導・支援②③	乳児期・幼児期・学童期			
	11	小児難聴の指導・支援②③	乳児期・幼児期・学童期			
	12	小児難聴の指導・支援④	音声言語習得上の課題			
	13	小児難聴の指導・支援⑤⑥	ハビリテーションプログラムの立案			
	14	小児難聴の指導・支援⑤⑥	ハビリテーションプログラムの立案			
15	小児難聴の指導・支援⑦⑧	発達段階と学習方法				

履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容
	16	小児難聴の指導・支援⑦⑧	発達段階と学習方法
	17	障害認識へのアプローチ	発達段階ごとの特徴と指導
	18	軽度・中等度難聴児の課題	聴覚補償、言葉の発達
	19	学校教育における指導と課題	歴史、指導体制
	20	学校教育における指導と課題	歴史、指導体制

授業科目 (科目ID)	聴覚検査法Ⅱ		担当教員 (実務経験)	岡崎聡子 市内大学病院で13年、市内総合病院で8年言語聴覚士として勤務	
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数 1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数 30時間
授業目的	言語聴覚士が実施する代表的な検査の、目的・手順を学び、結果の分析を通して、聴覚障害の有無、タイプとの関係などの理解を深める。聴覚機能の鑑別診断に必要な評価法(自覚的、他覚的、乳幼児)を習得する。				
到達目標	・各種内耳機能検査の手順を理解し実施できる。・鑑別診断について学び必要な検査を知る。・平衡機能検査について学ぶ。				
テキスト・参考図書等	(教)聴覚検査の実際 第4版 南山堂				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70%	・定期試験(実技)と小テストにて評価を行う。		
	レポート	%			
	小テスト	30%			
	提出物	%			
その他	%				
履修上の留意事項	検査の理論を理解し、怪我がないように安全に配慮すること				
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	純音聴力検査	純音聴力検査の復習		
	2	機能性難聴の検査	機能性難聴の鑑別診断に必要な検査		
	3	内耳機能検査	自記オージオメトリの臨床的意義と手順		
	4	内耳機能検査	自記オージオメトリ		
	5	補聴器装用に必要な検査	補聴器処方、装用効果測定に必要な検査		
	6	内耳機能検査	不快閾値		
	7	内耳機能検査	閾値上聴力検査の臨床的意義と手順		
	8	内耳機能検査	閾値上聴力検査の臨床的意義と手順		
	9	内耳機能検査	語音聴力検査の臨床的意義と手順		
	10	内耳機能検査	語音聴力検査		
	11	内耳機能検査	語音明瞭度検査		
	12	乳幼児聴力検査	聴性行動反応検査(BOA)、条件設定反応検査(COR)、遊戯聴力検査(play audiometry)		
	13	他覚的検査	聴性脳幹反応(ABR)、聴性定常反応(ASSR)		
	14	他覚的検査	耳音響放射(OAE)		
15	平衡機能検査	めまいの機序、電気眼振図			

2023年度

専門学校北海道リハビリテーション大学校

言語聴覚学科

授業科目 (科目ID)	臨床実習Ⅱ		担当教員 (実務経験)	松山 大輔 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/>	
対象年次・学期	2年・後期		必修・選択区分	必修	単位数 4単位
授業形態	実習		授業回数(1回90分)	80回	時間数 160時間
授業目的	学内での知識技術の習得、および臨床実習Ⅰにおいて学んだことを活用し、症例を通じて情報収集、評価・記録、目標設定までの過程を学ぶ。				
到達目標	対象者とのレポートを形成し、評価を通して、対象者の問題点を抽出し、障害像を把握、適切な目標設定ができる。 臨床教育者の指導の下、適切なデイリー、評価報告書の作成ができる。				
テキスト・ 参考図書等	特に指定しない。				
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	%	臨床教育者の評価と学科教員の評価を合わせて総合的に評価する。 評価項目(実習施設) 1、医療者としての資質・適性 2、信頼関係の形成 3、適切な評価の選択と実施、分析 4、訓練計画の立案		
	レポート	%			
	小テスト	%			
	提出物	%			
	その他	100%	評価項目(学校) 1、実習前準備 2、提出物 3、実習後の発表 実習施設60%、学校40% 200点満点中120点以上を合格とする。		
履修上の 留意事項	患者を第一に考え、実習指導者を通して自らの課題が解決できるように積極的に実習に臨むこと。				
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1~80	臨床実習Ⅱ	1 症状を把握し、習得した知識や技術と照合し検討することができる。 2 言語聴覚療法において必要な検査を選択し、評価を実施することができる。 3 評価の結果から問題点を抽出して目標設定、プログラム立案を行い、適切な評価報告書を作成することができる。 4 実習報告会を実施し、内容を伝達することができる。		

授業科目 (科目ID)	高次脳機能障害演習 I		担当教員 (実務経験)	北風 祐子 道内病院で言語聴覚士として20年以上勤務し、養成校にて15年以上勤務	
対象年次・学期	2年・前期		必修・選択区分	必修	単位数 1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数 30時間
授業目的	評価実習では実際の対象児・者に対して言語聴覚療法の評価や検査を実施し、結果の考察や分析を行い、指導・援助プログラムの立案を行う。そのために必要な種々の評価の目的や実施手順を学ぶ。				
到達目標	・種々の掘り下げ検査の目的を理解し、実施方法について習得する。 ・評価結果に基づき問題点、訓練立案などの報告書作成を試みる。				
テキスト・参考図書等	教科書は使用しない。適宜、資料を配布。 参考図書:言語療法マニュアル 改訂3版				
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90%	定期試験・提出物を合わせて評価を行う。		
	レポート	%			
	小テスト	%			
	提出物	10%			
	その他	%			
履修上の 留意事項	欠席、忘れ物せず、確実に復習をすること。				
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	言語聴覚療法とは	評価される側になる		
	2	掘り下げ検査	・HDS-R ・MMSE ・Kohs立方体組み合わせテスト ・ベントン視覚記憶検査 ・レーブン色彩マトリックス検査 ・トークンテスト		
	3	掘り下げ検査	・HDS-R ・MMSE ・Kohs立方体組み合わせテスト ・ベントン視覚記憶検査 ・レーブン色彩マトリックス検査 ・トークンテスト		
	4	掘り下げ検査	・HDS-R ・MMSE ・Kohs立方体組み合わせテスト ・ベントン視覚記憶検査 ・レーブン色彩マトリックス検査 ・トークンテスト		
	5	掘り下げ検査	・HDS-R ・MMSE ・Kohs立方体組み合わせテスト ・ベントン視覚記憶検査 ・レーブン色彩マトリックス検査 ・トークンテスト		
	6	掘り下げ検査	・HDS-R ・MMSE ・Kohs立方体組み合わせテスト ・ベントン視覚記憶検査 ・レーブン色彩マトリックス検査 ・トークンテスト		
	7	掘り下げ検査	・HDS-R ・MMSE ・Kohs立方体組み合わせテスト ・ベントン視覚記憶検査 ・レーブン色彩マトリックス検査 ・トークンテスト		
	8	症例検討	・ICFに基づき問題点を考える		
	9	症例検討	・ICFに基づき問題点を考える ・プログラム立案		
	10	症例検討	・ICFに基づき目標を考える ・プログラム立案		
	11	訓練	・ICFに基づき目標を考える ・プログラム立案		
	12	訓練	訓練の実際		
	13	報告書	きれいな日本語で正しい文章を書く		
	14	報告書	きれいな日本語で正しい文章を書く		
15	報告書	きれいな日本語で正しい文章を書く			